

すこやか

〈発行日〉令和7年 1月 22日

〈発行〉清水町生徒指導連絡協議会

〈研修会の報告〉

12月9日、清水小学校書写室において、『新しい「生徒指導提要」の趣旨をふまえた、これからの生徒指導のあり方』についての研修会を行いました。講師として十勝教育局義務教育指導班の安田英憲指導主事をお招きし、新しくなった生徒指導提要についてのお話をいただきました。①生徒指導の基礎、②生徒指導と教育課程、③チーム学校による生徒指導体制、④個別の課題に対する生徒指導、⑤生徒指導に関わる北海道教育委員会 HP の紹介と章立てで解説していただきました。

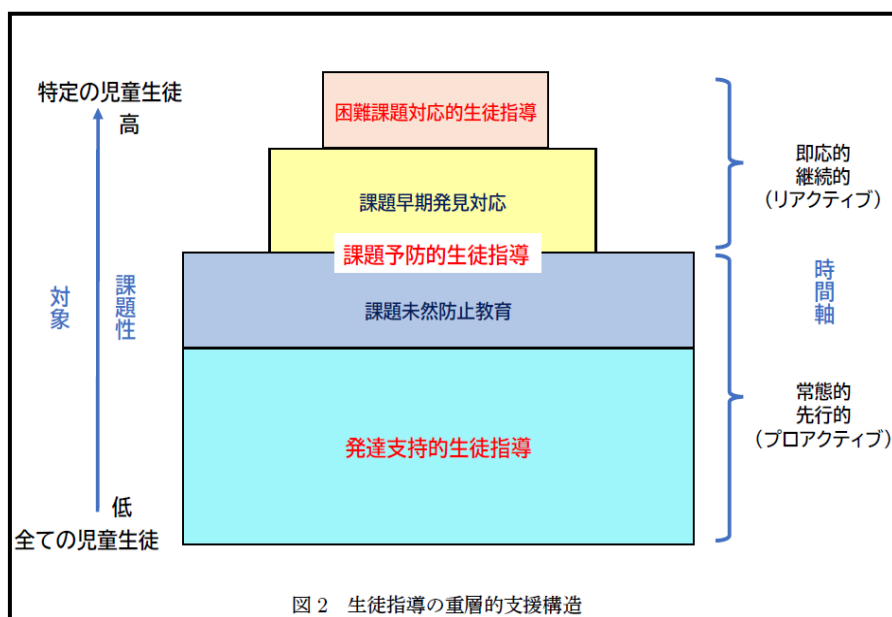


生徒指導提要へのアクセス

生徒指導提要は、全部を紙として印刷すると、かなりの分量になります。今回の研修会では、右の QR コードが提示されました。タブレット等で読み取ると、生徒指導提要にすぐにアクセスできます。持ち運びに便利になり、場所を問わず見る事が可能です。ぜひ、ご活用下さい。



「生徒指導の基礎」のお話の中から



今回の生徒指導提要の改訂の中で、一番大きく変わった考え方が、左側に示した重層的支援構造の図です。ケーキ図と呼ばれることもあります。これまでの生徒指導は、リアクティブ（起こった出来事に対応する）な指導が中心でしたが、新しい提要では、プロアクティブ（事前に行っておく）な指導、つまり、全児童生徒に向けて、普段の学校生活の中で行う生徒指導が重要になってくるということでした。

「生徒指導と教育課程」のお話の中から

プロアクティブな指導（ケーキ図における下2層の部分）において、学習指導は大きな意味を持ちます。学習指導の中で、児童生徒を理解するのは、もちろんですが、学習が安全・安心に行える環境づくり、人間関係づくりが重要となります。そして、自己存在感を実感させるということが大事で、学習をふりかえるときに集団で行うことにより、学習内容の共有、みんなで学習してよかったという実感が持てるとのことです。

これらのことは、道徳科を要として、教科指導、特別活動の中で意識的に行っていくことにより、全ての児童生徒に向けて生徒指導の基礎になる自己存在感や自己肯定感が育まれるとのことでした。



「チーム学校による生徒指導体制」のお話の中から

チーム学校とは、「校長のリーダーシップの下、カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体的にマネジメントされ、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、子供たちに必要な資質・能力を確実に身につけさせることができる学校」です。学校の人的資源として、教職員だけではなく保護者、会計年度任用職員等や外部人材や関係機関等と連携して指導にあたり、学校、保護者、地域が一体となった支援・指導が必要です。

「個別の課題に対する生徒指導」のお話の中から

個別課題とは、ケーキ図における上2層（リアクティブ）の部分のことです。いじめ・不登校ともに、事後の関係修復まで見据えて対処することが必要です。事案が発生する前の指導が重要で、年3回のいじめアンケートを中心として発見し、現状、重層構造（ケーキ図）のどの段階に該当するかを考えて対処していく必要があります。また、児童生徒が声を上げやすい（アクセスしやすい）環境づくりも重要となります。

<いじめについて>

いじめの定義としては、「当人が嫌な気持ちになったらいじめ」ですので、しっかりと見取っていくことが大事です。いじめの重大事態とされるには、①いじめにより被害が生じた疑いがある場合、②いじめにより不登校が誘発している疑いがある場合の2点です。いずれも疑いの段階でスピード感をもって組織的に対処すべきとのことでした。

<不登校について>

不登校は、昭和30年代半ばの「学校恐怖症」、昭和60年代ころまで「登校拒否」そして、「不登校」と捉え方が変遷してきました。「登校拒否」の時代は、だれにでも起こりうる、待つことが大切と考えられていました。最近では待つはいけないうるケースもあるとして、いじめを原因とするもの、背景に虐待が考えられるもの、発達障害から生じる二次的な問題に起因するものがあるとされています。保護者、児童生徒の気持ちに寄り添いながら、状況によっては、スピード感をもって対応していくべき課題と捉えています。

※年末の忙しい中、様々な校種の先生方が集まり、有意義な研修となりました。ありがとうございました。